2013年度
入試問題

一　次

国　語

注意

- この冊子は14ページまであります。
- 問題は㈠から㈢までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 特別に指示がない限り、句読点なども字数に含(ふく)まれるものとします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

六月に入った頃、健一たちの間で急にブランコ遊びが、はやりだしたのである。

そんなある日、中学生の毅が、取り外されたままのシーソーの板を持って来た。ガキどもには何をするのか見当がつかない。その板を二つのブランコに渡すのだと毅はいった。ブランコは四つあった。そのうちの二つのブランコを板でひとつにしてしまおうと考えたわけだ。その上に、毅を先頭に健一たち七、八人が乗り込み、ゆっくりとブランコを漕ぎだした。ガキどもはしだいに興奮し始め、キャッキャッという声があがり始めた。隣同士しっかりつかまっていないと、バランスが崩れて落下してしまう。緊張と興奮で、徐々にガキどもはこの変造ブランコに夢中になっていく。地面が揺れた。高く漕げ！　思いっ切り漕げ！　と一心不乱にブランコを漕ぐ。皆で一緒に思い切りブランコを漕ぐのは初めてだったが、何回かやるうちに誰がどこに座るといいのかもわかってきた。チームワークも徐々に出てきて、毅の指示に従い、声を揃えながら漕いだ。時々、恐怖が襲ってきた。見ている者には怖さだけが伝わっていく。［A］健一の妹がそれを見ていた。異様な雰囲気を感じたのだろう、青い顔になり、あわてて家に帰って父親に知らせた。しかし、父親は「男の子だから」と(a)イッショウに付した。

こうして、変造ブランコは興奮の坩堝と化し、連日、学校から帰ると我先にと公園にやって来るようになった。七、八人の少年を乗せたブランコは、毎日、暗くなるまで、大きく揺れ続けた。

三日目になってブランコの鎖が切れ、あぶなく誰かの頭が地面に激突しそうになった時は、一瞬、皆の顔もこわばったが、すぐに毅がもう一つのブランコに代えようというと、ガキどもは我にかえって隣のブランコに板を渡した。ふたたび変造ブランコはゆっくりと動きだした。健一はその時、厭な予感がした。しかし、何かいいだせる状況ではなかった。皆、一緒に漕ぎだした。集団で怖いことをするときの秘密めいた喜びがブランコを取り巻いていた。遊びはエスカレートしていく。誰かが泣くしか終わりはなかった。

漕げ！　もっと漕げ！　毅はヒステリックに叫び続けた。地面が揺れる。体がひっくり返りそうになった。興奮しているから、何度も行ったり来たりしているうちにだんだん恐怖も麻痺してくるような気がした。地面が揺れた。景色が反対に見えた。皆はそれでも漕ぎ続けた。

始めてから四日目だった。何かに憑かれたように、少年たちは顔を引きつらせながらブランコを漕ぎ続けた。

「それっ！　漕げ！　それっ！　漕げ！」毅が大声で狂ったように叫んでいる。鎖を持つ手が緊張のために汗ばんで鉄の匂いがした。もっと漕げ！　健一は気分が悪くなりそうだった。高さは限界にきていた。それでも少年たちは漕ぐのをやめなかった。一瞬、グラッとした。次の瞬間、地面が不自然に揺れて、急に目がぐるぐる回った。誰かがギャーッと叫び、泣きだす声がした。鎖が切れ、ガキどもは板もろとも落下したのだ。

健一は一瞬、どうなったのかわからなかった。地面に放り出され、腰を思いっきり打った。「いて！」と泣きそうになった。見ると二つのブランコに渡したシーソーの板がまっぷたつに割れて、ガキどもはばらばらに放り出されていた。吉岡弟は運悪く板の下敷きになってしまった。いつもは無口で、猫を追いかけ回すだけの吉岡弟も、この時ばかりは、泣き叫んでいる。①血の気の退いた毅はその場にいることがやばいと思ったのか、いきなり逃げだした。

吉岡兄が「大丈夫か。どこがいたいんだ？」と心配そうに弟に訊いた。健一は青ざめた顔で、呆然とその場に立ち尽くしていた。激しく泣き叫ぶ吉岡弟を、兄が(b)カツいで家に帰った。翌日、吉岡弟はあばら骨を折っていたことがわかった。大怪我になった。だが、よくあれくらいですんだともいえる。

こうして最後まで残っていたブランコも、②集団の狂気を呼び起こしてめちゃくちゃにこわされてしまったのである。公園は一年もしないうちに施設の全部がこわれて、原っぱに戻りつつあった。シーソーの鉄製の台と、滑り台の梯と上の部分が少しずつ持ち去られながらも、最後まで残った。ブランコは、しばらくは鋼鉄製の台だけは残っていたが、それも［B］、誰かが持ち

去って消えてしまった。

公園には、異様な残骸だけが残ったのである。

それから一週間ほどした日曜日。あれから誰もブランコの話はしなかったし、公園にも近寄らないようにしていた。

健一は、近所のガキどもと一緒に線路を見に行った。その頃の東上線はよくストライキをやった。その日は朝から電車が止まっていると父親から聞いていた。

明と吉岡兄、それに(注1)イタチが加わって、線路の方に歩いて行った。どこかの家のラジオから流行歌が流れている。砂利道を進むと、踏み切りにぶつかった。遮断機が上がったままになっている。いつもなら鉄道帽子を被ったおじさんがいるのに、その日は誰もいなかった。父親のいう通りだ。健一は線路に飛びだした。視界がひらけて、上りの線路が一直線にどこまでも見える。下り方向の線路はゆるくカーブを描いていて、線路ぎわの木々が色濃く繁ったあたりで見えなくなる。

梅雨にはまだ間のある、よく晴れた日だった。健一たちは、駅から川越に向かう方向に、線路づたいに歩いて行った。何も音がしない。ただ風が吹いているだけだ。時折、線路に砂利か何かがあたる音が伝わってきた。振り返るとS駅が小さく見えた。線路の上を歩くのは、普段できないことだったから、歩いているだけで、ワクワクした。下りの線路を進んで行くと、人家がまばらになり、林の中に農家が点々と見えるだけになった。線路は遠くまで一直線に見える。普段見慣れない風景が広がって、最高の気分だ。時折、線路の隙間からトカゲが這い出て、また隠れた。

健一は枯枝を手に持って、枕木をひとつずつ飛び越えて行くことに熱中していた。

やがて線路は鉄橋に差しかかった。明は斜視ぎみの目をこらして、遠くを見た。線路がキラキラ光って見える。少年たちは鉄橋の前で立ち止まった。そこからは百メートルにおよぶ鉄橋が続いている。健一は一歩前に出て下を見た。体が震えた。下には川が悠然と流れている。誰にもいわないが、健一は軽い高所恐怖症なのである。しかし子供の世界は、それをいったら、おしまいだ。

何をされるかわからない。健一は体が震えた。皆が帰ろうといいだすことを祈った。

その時、明が、鉄橋を渡るべえといった。すぐにイタチが長靴を脱いで鉄橋を渡りだした。一番になろうとしたのだ。明もイタチに負けまいと鉄橋を渡りだした。

健一は黙ったままだ。胃のあたりに重いものが沈んでいるみたいだった。吉岡兄は気が進まないらしく、「おーい。本当に行くのかよ。俺、帰るよ」とぶつぶついいだした。

こいつも怖いのだと健一は思った。二人で(i)踵を返せばよかったものを、少年はそれができない。「お前、怖いんだろう」と震える声をなんとか抑えていった。

「ちがわい」吉岡兄は③むきになって健一を睨みつけた。

「いいよ。渡ればいいんだろう」そういうと吉岡兄はおそるおそる渡りだした。健一はやばいと思った。最後になってしまう。このまま逃げだそうかと迷っているうちに、鉄橋を半分ほど進んでいた明がこちらを振り返った。

「健ちゃん。早く来いよー」明の声は鉄橋の上に響いた。健一はちょっと立ち止まって「い、行くよ」と小さくいうと、こわごわと鉄橋を渡りだした。下を見ないようにゆっくりと枕木をつたって行く。緊張のあまり口の中が渇いてきた。太陽の光が反射して、線路がピカッと光る。健一は、つい下を向いてしまった。枕木の間から川が見えた。流れの音まで聞こえるような気がした。体がすくむ。泣きそうになった。健一は思わず枕木の上にしゃがみ込んだ。

明はそれを見ていた。斜視の目でしっかりと見ていた。「健ちゃん。怖いのか？　怖いんだ。俺なんか、こうやっても、怖くないぜ」明は枕木の上でぴょんと跳びはねた。恐ろしいことをする奴だ。ちくしょうと健一は思った。いまはもう負けん気だけが支えていた。

イタチが笑いながら、手に持った長靴を頭の上でバンバンと鳴らした。

吉岡兄は何もいわない。 C 鉄橋を越えようとしている。健一はしゃがみ込んだまま少しずつ前に進んだ。下を見ては

いけない。どうにか四分の一ほど進んだ。④健一の顔は白っぽくなっている。渡り終えたばかりの明が、健一の狼狽ぶりを見て「しょうがねえな」といいながら健一の方に引き返して来た。

その時だ。遠くで警笛が聞こえた。明は枕木の上に突っ立って「あれっ。電車、来るよ！」と叫んだ。健一は、しゃがんだまま後ろを振り返った。ストが(c)カイジョになったのだ。

S駅の方から電車が向かって来る。健一は思わず立ち上がった。戻ろうか。彼は、いまにも泣きそうだった。一瞬頭の中が真っ白になった。警笛がまた聞こえた。電車はすぐそこまで来ている。そのとき、明が「健ちゃん。下に隠れろ！　早く！　隠れろ！」と叫んだ。叫びながら明は線路の下に素早く隠れた。

健一は、あわてて枕木の下に組んである鉄骨の間に身を隠した。真下に流れる川がはっきり見えた。健一は手をしっかり握りしめて、体を丸くしたまま、じっと(ii)息を殺していた。

やがて電車の音が近づいてきた。健一は、声をあげて泣きだしそうになった。電車は物凄い轟音をたてて頭上を通り過ぎて行った。線路を伝う規則的な音がしだいに小さくなっていった。

健一は枕木の上に頭を出した。明も頭を出した。

「早くしろ！」と明は健一にいった。健一は、枕木の上に出ると、しゃがんだまま(d)ムガムチュウで鉄橋を戻った。

健一は線路脇の草むらに倒れ込んだ。明がそばに来て立ったまま、健一にいった。

「大丈夫か？」

健一は青ざめたまま、首を縦に振った。言葉は出なかった。いまあったことが本当だとは思えず、黙ったまましばらく倒れ込んでいた。⑤明は白っぽくなった顔をあげて鉄橋の向こうを見た。イタチと吉岡兄がこちらに向かっているところだった。

「電車、凄い音だったな」と斜視ぎみの目をパチパチさせて、明は独り言のようにポツンといった。

健一は、明のことをえらいと思ったが、口ではうまくいえなかった。まだ体が震えている。

やがて、すこし落ち着いてから、健一は明に訊いた。

「線路の下に入るのは、前にやったことがあるのか？」

「ねえよ。とっさだよ」

「ふーん。でもよくできたよな」

明は小枝から葉っぱをむしり取って口に入れた。健一の目には、明が、その日は［　D　］男らしく見えた。

（永倉萬治『武蔵野S町物語』による）

（注1）イタチ……健一の友達の一人。

問一　═══(a)～(d)の、カタカナを漢字に直しなさい。

問二　［　A　］～［　D　］にあてはまる語として最も適当なものをそれぞれ選びなさい。ただし、同じものは二度以上使わないこと。

ア　いつしか　　イ　たまたま　　ウ　つい　　エ　ひたすら　　オ　やけに

問三　〰〰(ⅰ)・(ⅱ)の言葉の意味として最も適当なものをそれぞれ選びなさい。

(ⅰ)踵(きびす)を返せば

ア　意見を合わせれば
イ　協力すれば
ウ　反対すれば
エ　後戻りすれば

(ⅱ)息を殺して

ア　息もできずにじっとしていて
イ　息をおさえて音をたてないようにして
ウ　驚きや恐れのために一瞬息を止めて
エ　深く呼吸して息を腹にこめて

問四　――①「血の気の退いた毅はその場にいることがやばいと思ったのか、いきなり逃げだした」とあるが、毅の逃げだした理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　ルールを守らずに遊んでいたために遊具を壊してしまったことを責められると思ったから。
イ　吉岡弟があばら骨を折るほどの大きな事故を起こしたことに気付き、あわてふためいたから。
ウ　年長者として変造ブランコ遊びの主動的立場にいた責任を問われることになると思ったから。
エ　このような事故を起こした以上、健一たちが自分の指示には従うことはないと悟ったから。

問五　――②「集団の狂気」とあるが、ブランコの事件において彼らがその状態に陥ったことがよく分かる一文を二つさがし、それぞれ最初の三字を答えなさい。

問六　――③「むきになって健一を睨(にら)みつけた」とあるが、なぜ吉岡兄はこのような反応をしたのか。本文全体の内容を踏まえて五十字以上六十字以内で答えなさい。

問七　――④「健一の顔は白っぽくなっている」および――⑤「明は白っぽくなった顔をあげて鉄橋の向こうを見た」において、健一も明も顔面蒼白の状態になっているが、その原因は全く同じであるというわけではない。健一と明とで違いが分かるように、顔が白くなった原因を六十字以上七十字以内で具体的に説明しなさい。

問八　この文章全体の特徴について説明したものとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　反復を用いることによって、その場面の印象を強めている部分がいくつかある。
イ　子どもたちが様々な経験を通して成長していく様子を第三者的立場から描いている。
ウ　当時の子どもたちの日常生活を伝えようと、風景描写が多く取り入れてある。
エ　理性を失うことが多い子どもの世界を表すために「！」を多く用いている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私の子供のころ、駅のホームにも、学校の運動場にも、公園にも、水飲み場があった。まるで里程標(注1)のようなコンクリートの杭に水道の蛇口がついていて、その蛇口に、かならずクサリでアルミニウムのコップがぶらさげられていた。水を飲むときにはそのコップを水でゆすいで、それからなみなみと(a)ソソぎ、一気に飲み干した。そのうまさといったら！

コップは例外なくデコボコだった。何人がそのコップで水を飲んだかわからない。いまの子供たちなら、不潔で不(b)エイセイだというだろう。それより、飲んだら捨てる紙のコップを置くほうがいい、と。しかし、新幹線やジェット旅客機のなかで飲む紙コップのアイス・ウォーターより、デコボコのコップで飲んだ水のほうが何十倍もおいしかった。何よりも、デコボコのコップには歴史があった。何人もの人間がこれで喉をうるおしたという歴史が。そして、その歴史がコップの実体を、実体としてのコップを、ほんとうのものとしてのコップを、つくりあげていたのだ。デコボコのコップは、水を飲むための機能としてそこにあるのではなく、実体として、大げさにいうなら①神の息吹きとしてそこにあったのである。

コップにかぎらない。弁当箱も、箸箱も、エンピツ箱も、またタバコ盆や黒光りする鰹節けずりも、つぎの当たったズボンも、何から何までが「実体」であった。

ところが、いまはどうであろう。水飲み場のコップは使い捨ての紙製になった。エンピツは電動式のエンピツけずりで、あっという間にけずられ、短くならないうちに捨てられてしまう。鰹節けずりも半自動的になった。それらは機能的には進歩した。だが、実体的にはまったく希薄になった。便利にはなったが、②歴史とは無縁になったのである。

私は、古いものはいいものだ、といおうとしているのではない。家具や道具は、機能的に進歩すれば、それだけ便利になる。不便な道具より便利な道具のほうがいいにきまっている。

けれど、機能という面ばかりに目を向け、便利さばかりに気をとられていると、やがてそれは空虚さを、実体の喪失感を呼びます。何のための便利さか、ということになるのだ。なぜなら、人間は便利さのためばかりに生きているのではないからである。あまりに便利な機能一点張りの環境は、その無抵抗さのゆえに、あたかも宙を浮游する宇宙飛行士のあの無重力状態のような不安をよびおこす。

そのいい例が建物である。あるいは都市である。現代建築は、そして現代都市は、すべて機能という点に神経を集中して設計された。おかげでビルも、町も便利になった。だが、便利だということと、住みいいということとはおなじではない。皮肉なことに、現代建築は便利だが住みにくく、現代都市は住みにくいが便利だ、という奇妙な③二律背反に置かれることになった。建築における機能主義は失敗した。理由は、気がついてみれば単純なことだったのだ。すなわち、人間は便利さのためにのみ生きるのではない、ということである。ミッシェル・ラゴンは『巨大なる(c)過ち』(注2)という著書のなかで、哲学者ハイデッガー(注3)の言葉を引いているが、まさしくその通りだったのだ。すなわち、「住むというのは居住するということではない。④住むということは、その本質において詩的」なのである。

詩を忘れた機能主義は、まず建築の分野で破産した。

便利さを性急に求める日本人の心性は、アメリカの能率主義にとびついた。そして、アメリカと手をとりあって、またたく間に「使い捨て文明」「インスタント文化」をつくりあげた。最近では高層ビルのなかに爆薬をしかける装置がちゃんと設計されているという。こわすときに便利なように、である。ビルはせいぜい数十年で(d)老朽化するから、そのとき破壊し、新しく建て直すことを考えに入れておくというわけだ。「使い捨て」はビルにまで及んだのである。赤ん坊のおしめや、ライターやストッキングばかりではない。

私は「使い捨て」商品を悪いとはいわない。たしかにある品物については、使い捨てたほうがいい場合があろう。私がいいたい

のは、そのような「使い捨て」が招くであろう「使い捨て」の報酬についてである。使い捨てているうちに、いつの間にかそれ以外にものが考えられなくなってしまう「使い捨て精神」の支配である。

⑤ビルにまで及んだ「使い捨て」の心性は、間もなく人間そのものにまで及ぶであろう。つぎにやってくるのは、人間の使い捨てである。人間の使い捨てとは何だろう。それは人間をひとつの実体としてではなく、一個の機能としてしか考えないような人間の扱い方である。たとえば会社の、あるいは家庭の、その他さまざまな人間組織のなかの、一個の役割としてしか人間を考えないおそるべき心性である。そのとき人間は、人間としての役割を捨てて、役割としての人間になってしまうであろう。そして、そのような役割としての人間は、その役割が解かれたとき、人間を解かれることになるのである。こうして人間はつぎつぎに使い捨てられる物品か道具のようになってしまう。

いや、げんにそうなりつつあるではないか。役割を解かれた老人は家庭から疎外され、何の役割も持てぬ子供は平気で捨てられている。たがいに役割を認めなくなった夫婦は、(e)ミレンもなく離婚する。最近の人間関係のおそるべき荒廃は、こうした使い捨て文明のもたらした［A］以外の何ものでもない。

ハイデッガー流にいうなら、それは「詩」の喪失ということであろう。私はそれは「実体」の喪失といいたい。「実体」の喪失とは、その人間が、その物品が、存在しつづけてきた、そして、これから存在しつづけるであろう「歴史」の抹殺にほかならない。だとすれば、いま、私たちにとっていちばん大切なことは、あらためて「歴史」というものを考え直してみるということではないか。便利は結構。合理主義も結構。だが、何のための便利さか、何のための合理主義か、それを問い直すことは「歴史」を問うことなのである。なぜなら、歴史こそが「実体」の生みの親であり、「実体」こそが、その「なぜ」に回答を与えることができる唯一のものだからである。

原形があってこそ、つぎは当てられる。「使い捨て文明」の錯覚は、⑥つぎを原形のように思いこむことである。つぎは、あくまでもつぎでしかないのだ。

あなたは、きょうも何かを捨てるでしょう。いいんです。どうぞお捨てください。私は、何も捨てるな、というわけではありません。そうではなく、捨てるとはどういうことか、何を捨てようとしているのか、それを考えてほしいというのです。もしかしたら、自分は、いちばん大切なものを捨てようとしているのではないか、「歴史」を捨てているのではないか、ということを。

（森本哲郎『豊かな社会のパラドックス』による）

（注1）里程標……道ばたなどに立てる、道のりを記した標識
（注2）ミッシェル・ラゴン……フランスの作家・美術批評家
（注3）ハイデッガー……ドイツの哲学者

問一 ═══(a)～(e)の、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ──①「神の息吹きとしてそこにあった」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 私たちが人間らしい生活をするために必要な道具として存在したということ。
イ 私たちが多様な人間関係の中で生きることを感じるものとして存在したということ。
ウ 私たちが水の大切さについて自然と考えるようになるために存在したということ。
エ 私たちが自分の人間関係を無意識に考え直すきっかけとして存在したということ。

問三 ──②「歴史とは無縁になった」とあるが、これを三十字以上四十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問四　――③「二律背反」とほぼ同じ意味を表すことわざとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　あちらを立てればこちらが立たず
イ　あぶはち取らず
ウ　木を見て森を見ず
エ　帯に短したすきに長し

問五　――④「住むということは、その本質において詩的」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　住むということは、自分たちの感性にうったえる世界を作り上げるということ。
イ　住むということは、人やものがたがいにせめぎあって生きるということ。
ウ　住むということは、居住空間と調和した状態で生きるということ。
エ　住むということは、便利さよりも華やかさを求めて生活するということ。

問六　――⑤「ビルにまで及んだ『使い捨て』の心性は、間もなく人間そのものにまで及ぶであろう」とあるが、筆者はそれがどんな結果をもたらしていると述べているか。十五字以内で抜き出しなさい。

問七　A　に当てはまる語句として最も適当なものを、本文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問八　――⑥「つぎを原形のように思いこむこと」とあるが、これを三十字以上四十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問九　本文において筆者の述べていることとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　コップや弁当箱や筆箱やエンピツ箱は、私たちにものを大切にしなければならないということを教えてくれた。
イ　機能一点張りの環境に必要なものは、古いものには歴史があり、それは便利さよりも重要だということに気がつくことである。
ウ　便利さを性急に求めるあまり、「使い捨て文明」を良しとした日本人は、ついにアメリカと手を組むようになってしまった。
エ　ものを捨てるとはどういうことかを考えることは、私たちがかつての豊かな暮らしを取りもどすきっかけとなるのである。

二〇一三年度　国語解答用紙（一次）

解答はていねいに書くこと。
記号や句読点も一字に数えること。
※欄には記入しないこと。

受験番号
氏　名
※

渋谷教育学園幕張中学校

一

問一
a
b
いで
c
d

問二
A
B
C
D

問三
i
ii

問四

問五
・

問六

問七

問八

※

※

二

問一
a
ぎ
b
ち
c
d
e

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

※

※